# 尾道商業会議所記念館
# 第33回企画展示解説

2017年11月10日～2018年2月28日

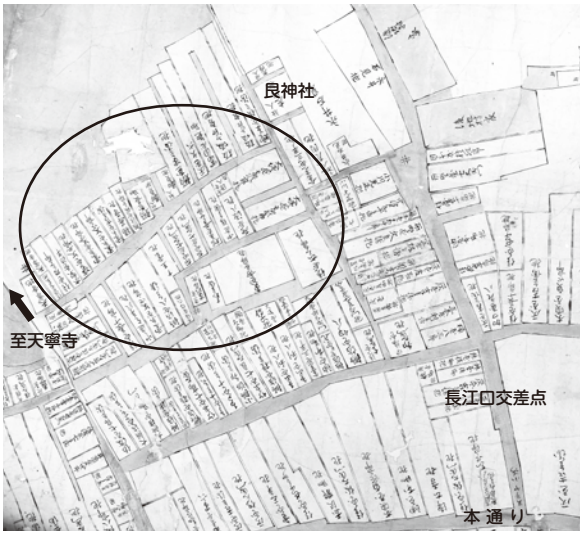
**テーマ　尾道刀工伝　～其阿弥と辰房～**

前回（第32回）の企画展示「ものづくり職人が造った郷土玩具」に見られたように、尾道は商人の町であると同時に「職人のまち」としての歴史を持ちます。

石屋町、杓屋小路、塗屋小路、研ぎ屋小路、そして鍛冶屋町と、旧地名や小路の名の内に、それぞれの職人達が集住した職人街の名残を留めます。そうした職人達の中でも、中世に遡る古い歴史を秘めるのが鍛冶職人であり、江戸時代以前は主に刀鍛冶として活躍し、今にその作品を遺します。

尾道の刀工としては、三原正家に始まる系譜に属す「其阿弥」（其を「五」と表記する場合もある）と、同系譜より分派した「辰房」（呼称についてはトキフサとも）の二派が知られ、その内の其阿弥長行などは、備後一宮吉備津神社（福山市新市町）への奉納太刀が国指定の重要文化財となっており、また、鍛冶屋町に隣接する長江の艮神社境内に、長行を称える頌徳碑も建つなど、腕の高い名刀工も輩出しているようです。

本展示では、其阿弥と辰房からなる尾道刀工の存在から、職人のまち尾道の歴史の一端をご紹介します。




鍛冶の職人街であった中之段界隈

江戸時代の『尾道町全図』（1821・文政4年）より

（全図原本・尾道中央図書館蔵）

艮神社に残る尾道鍛冶職人の跡

（左）鍛冶屋の守護神・金山彦神社　（右）其阿弥長行頌徳碑

（ともに尾道市長江・艮神社境内）

## 尾道刀工　其の壱　其阿弥

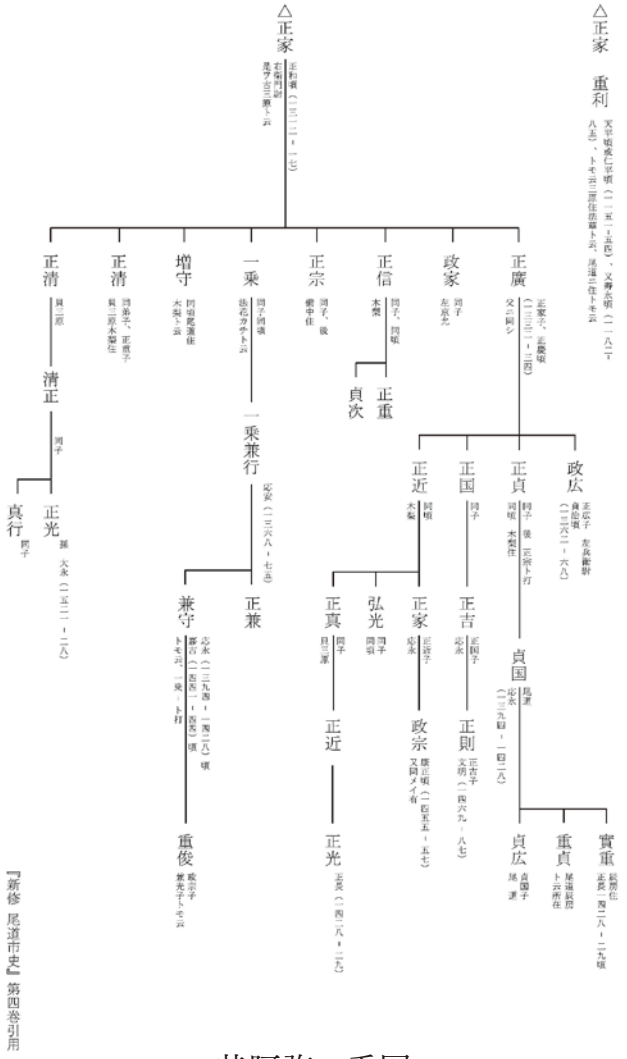
尾道の刀工（刀鍛冶）でその名をよく知られるのが「其阿弥」です。

その由来について、江戸時代の1719（享保4）年、当代の其阿弥清兵衛が尾道町奉行に提出した由緒報告によると、祖先についての詳しい経過は不明ながら、鎌倉時代後期に時宗二祖の他阿真教上人が諸国遊行（各地を巡って念仏を布教）で尾道へ来られた時、6代目当主が御札切りの小刀を上人に献上しました。それに対して時宗の法号である阿弥号の中でもランクの高い「其阿弥」の号を褒美に授けられたと伝え、以後、其阿弥が姓ともなり今に続きます。この他阿上人は、時宗常称寺（西久保町）を開いた存在として登場します。

常称寺に残る過去帳には、其阿弥は三河の国（愛知県東半部）から尾道へ至ったとの断片的記述もあり、遊行上人と共に来着し、そのまま尾道へ居住した信者の一人であった可能性もあります。

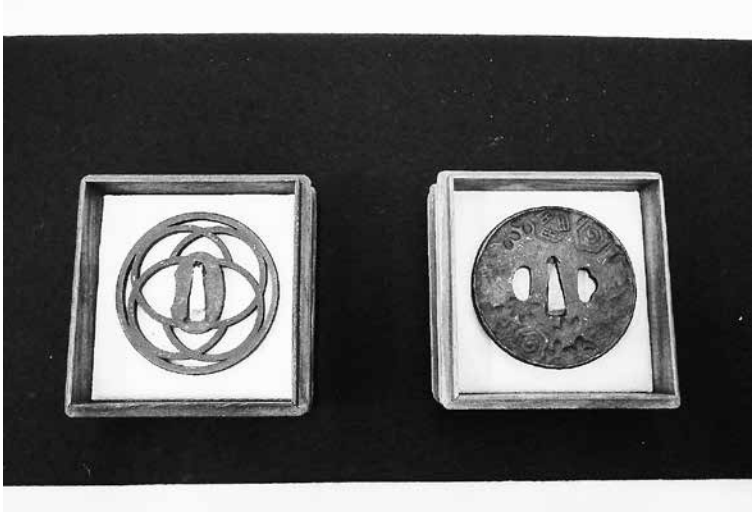
其阿弥の系譜を継ぐ刀工の中でも、戦国（室町）期の「其阿弥長行」などは、備後一宮吉備津神社（福山市新市町）への奉納太刀が国の重要文化財に指定され、尾道鍛冶屋町に隣接する長江の艮神社境内に頌徳碑が建立されるなど、一際輝きを放った刀工として活躍していた事が想像されます。

其阿弥清兵衛の祖父の時代（江戸時代の幕開け頃）に、刀鍛冶から鎌や庖丁といった農具が生活用具の鍛冶に転じたとされています。戦国の世の終わりと共に、尾道鍛冶は平和産業へ切り替わり、江戸時代以降にあっては、とりわけ「四爪の錨（碇）」と呼ばれた錨の製造でその名を全国に轟かせました。

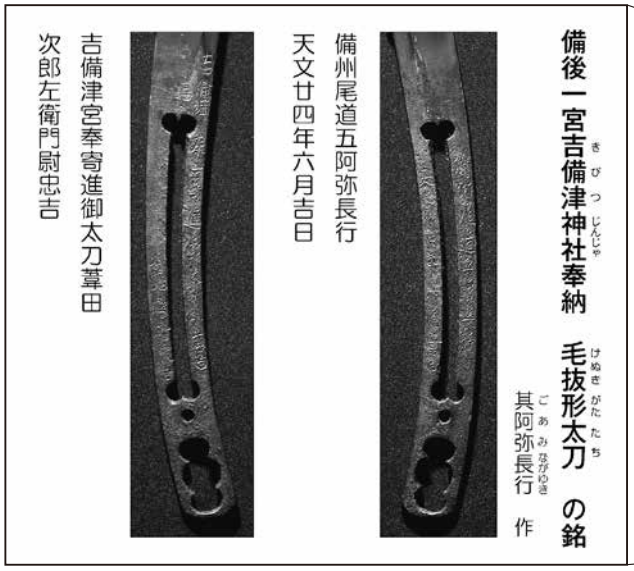


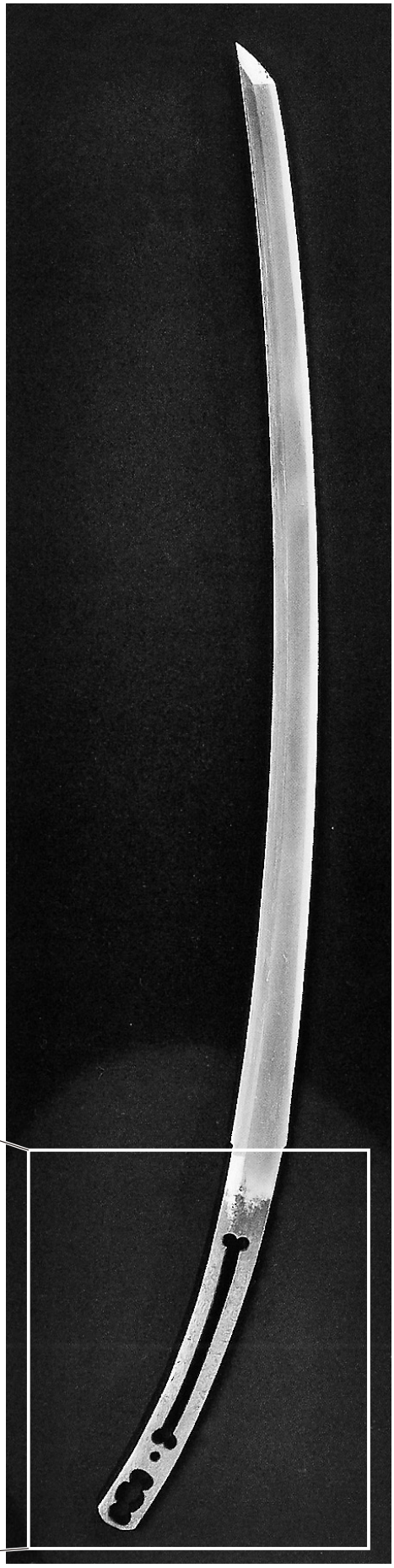

其阿弥の系図

刀　銘「備州尾道住人其阿弥長行作」
室町時代　尾道市立美術館蔵　市重要文化財



其阿弥作の鍔
江戸時代　（株）山崎清春商店蔵



国指定重要文化財
備後一宮吉備津神社奉納　毛抜形太刀
其阿弥長行作　室町時代　（1555・天文24年）
吉備津神社（福山市新市町）所蔵

## 尾道刀工　其の弐　　辰房

其阿弥に対して、その来歴が詳しく分かっていない今一つの尾道刀工に、「辰房」（たつぼう、或は「ときふさ」とも）の流れがあります。

其阿弥に同じく「三原正家」に始まるといわれ、そこから分派した一派という事は確かなようです。辰房は姓とするもの、または地名とする説があります。辰房派の系図は初代「重光」の銘にはじまり、以後、「重」の字が代々引き継がれていきます。

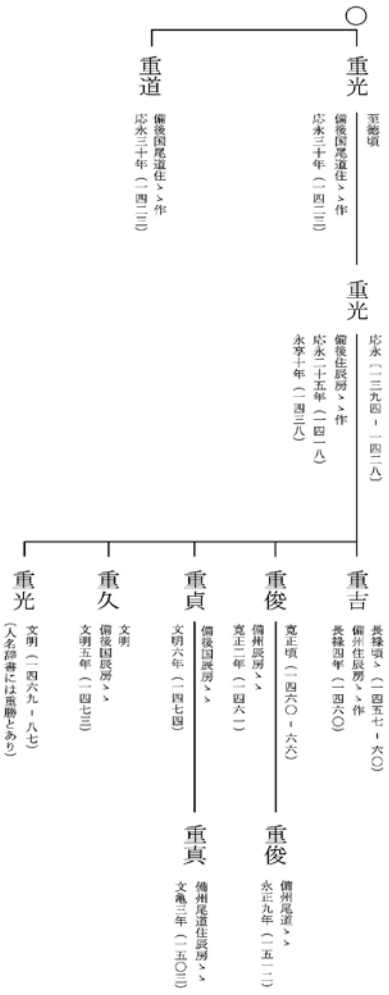
江戸時代の尾道の儒者・勝島維恭が著した『芸備古跡志』(1803・享保3年）に「尾道に辰房といへる地名なし、辰房は恐らく称号なるべし」とあることから、江戸時代の段階で既に幻の如き扱いになっています。

別に、毛利家家臣の文書を集成した『萩藩没閲録』（遺漏巻四ノ二）の中に、室町時代後期の1526（大永6）年に、尾道・三原の内に、「辰房屋敷」の記述があります。この資料によって『新修尾道市史』（第四巻・青木茂編著）では、「辰房は称号ではなく、辰房と称する冠頭名の屋敷地だ、と判断せざるを得ない。」と推測しています。

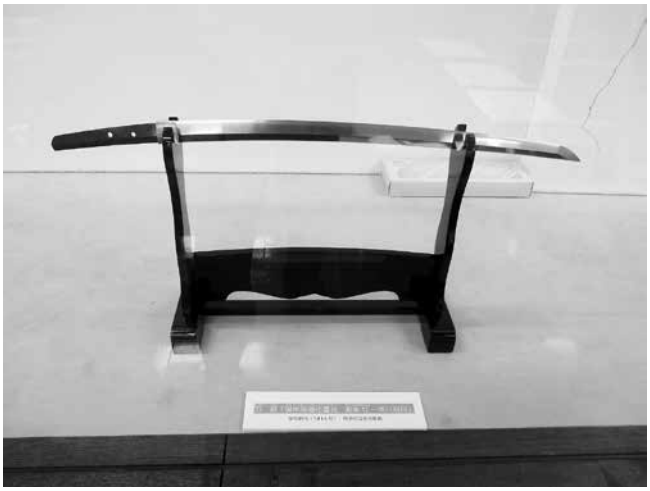
なお、伝承として長江の妙宣寺（日蓮宗）境内に辰房の井戸があったとされることから、同寺界隈に住していたともいわれています。この界隈は、其阿弥長行頌徳碑のある艮神社、そして鍛冶屋町が広がる範囲でもあります。

来歴は不明な点が多いながらも、その作品は比較的多く残っており、時代としては南北朝時代～室町時代にかけて、銘を刻むものでは室町のものに限られるようです。

その他、地元の池に棲む大蛇を退治した伝説の刀として、「辰房丸」という名刀のお話が、其阿弥家の伝承で語り伝わります。

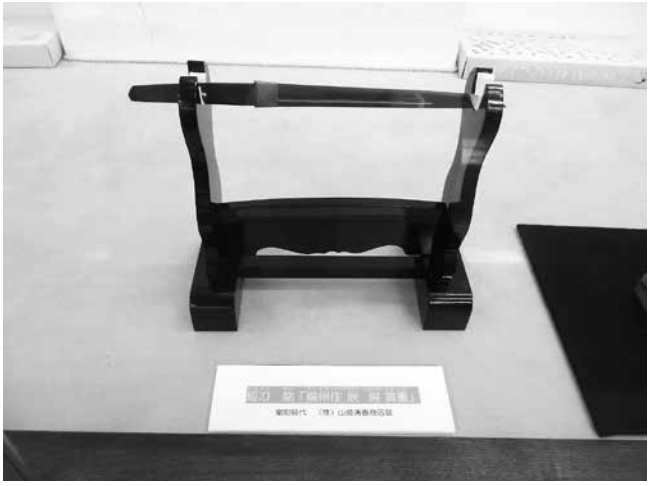



辰房の系図



刀　銘「備州尾道住重光 応永廿一年八月日」

室町時代（1414年）　尾道市立美術館蔵



短刀　銘「備州住辰房實重」

室町時代　（株）山崎清春商店蔵

### 辰房丸の伝説

── 古老の傳説には、昔或人池の堤に醉臥し居けるに、池中より大蛇躍出し、紅の舌を巻て醉人に向う。醉人の帯たる刀＜其阿弥先祖某の作＞自然に抜ケ出て蛇に敵す。或は追下し或は追来る。進退五六度にして、終に利劔の下に斃、刀も亦鞘に納れり、行人是を窺見、醉人を助け起し、共に利刀の威徳を感ぜしとぞ。其事上聞に達し、其鍛冶へ辰房丸と云号を賜しと云。今鍛冶久次郎なるもの、此其阿弥の後裔なりと云 ──

『新修　尾道市史』第四巻より

〜古老が伝えるところによると、むかしむかし、とある人がお酒に酔って池の傍に寝ていると、池の中から大きな蛇が現れ、真っ赤な舌を覗かせながら酔った人へと近づいて行きました。

すると、酔った人の帯びていた刀（其阿弥のとある先祖の作品）が鞘から独りでに抜け、蛇に向かっていきました。刀と蛇は一進一退の攻防を5、6度繰り広げた末、とうとう刀の鋭い刃によって蛇は死んでしまい、刀は鞘に納まりました。この様子を窺い見ていた人が酔った人を助け起して、この刀の力に感じ入りました。このことがお上の耳にまで入り、この刀を打った鍛冶職人は辰房丸という号を賜りました。現在では鍛冶職人の久次郎という者が、号を賜った其阿弥の子孫であると伝えられています。〜

# 備後の刀工

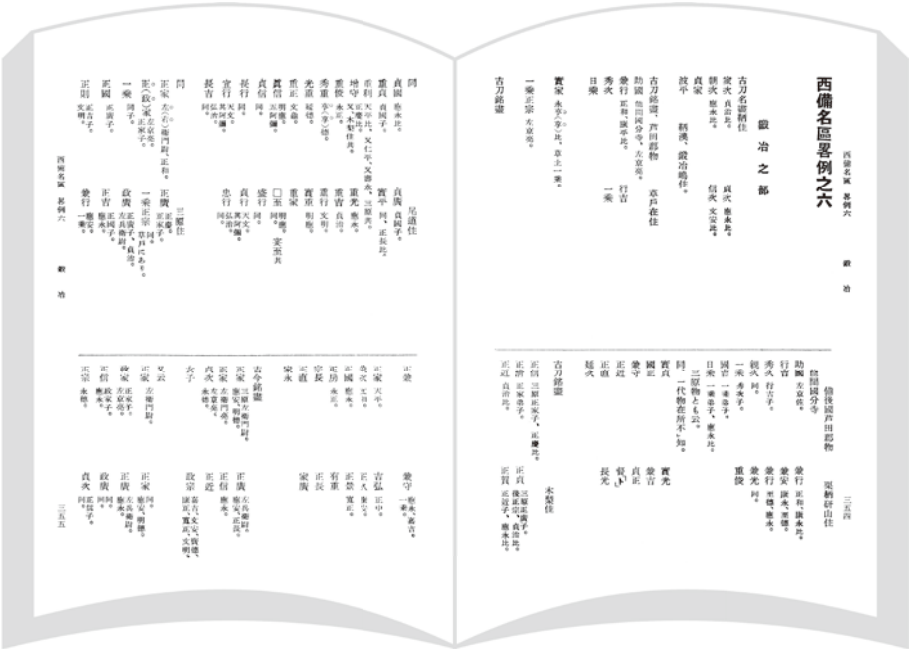
砂鉄の一大産地である中国山地を擁する広島県は、製鉄と鉄加工が盛んな地域として古くから知られますが、とりわけ備後地方にあっては、集散地・積み出しの港となる尾道と鞆を中心に、鍛冶職の集住を見ました。

備後の刀鍛冶を見てみると、其阿弥と辰房が属す三原正家に始まる「三原物」と称される系統と、時代的にはそれ以前（鎌倉末期）にまで遡る「国分寺助国」の系統と、大きく分けて二つの系統が見られたようです。

三原物は、初代正家以降の初期の代（南北朝時代まで）の作品を「古三原」、室町時代初期から中期までを「三原」、室町時代末期までを「末三原」と分類されます。末三原の内に尾道の其（五）阿弥と辰房、その他に三原市域と目される「木梨三原」、「貝三原」、福山では「鞆三原」、「法華（一乗）三原」の分派が見られます。「一乗」は草戸稲荷神社のある福山市草戸町界隈を拠点とした刀工集団で、法華宗に帰依して「一乗」と名乗りました。銘には「一乗」「法華一乗」などがあります。南の水呑町にある日蓮宗妙顕寺の建立にも関わる伝承も聞かれます。

三原系とは別に鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて作品が残っている「助国」があります。「助国」は、備後国安那郡下御領村国分寺、現在の福山市神辺町下御領界隈を拠点に活動した刀工です。この国分寺系と共に、岡山県井原・矢掛方面の刀工と関係する水田系と称する別系の刀工も存在したようです。こちらの水田系は、「備後三次住水田国重」の銘を持つ江戸中期の刀が見られます。

安芸（広島県西部）にあっては、現在の広島市域に「大山鍛冶」、「刀匠二王」などが存在し、福島正則が広島入りした折には、清洲（愛知県清須市）から美濃系の刀匠が共に入って広島城下で活躍していたようです。




西備名區畧例之六　鍛冶之部

『西備名区』（1804・文化元年）より

| 年号 | 名 | 摘要 |
|---|---|---|
| 弘安徳治 | 正家 | 右衛門尉 |
| 建武 | 二代正家 | 初名正廣 |
| | | 左衛門尉　兵庫亮 |
| 康永 | 正光 | 左兵衛尉 |
| | | 初代正家弟 |
| 貞和 | 政家 | 左京亮 |
| | | 初代正家二子 |
| 正平 | 正吉 | 正国子 |
| | 正清 | 木梨貝正清 |
| | | 貝三原の祖 |
| 観応 | 兼安 | |
| 文和 | 兼次 | 一乗 |
| 延文 | 兼光 | |
| 永和 | 二代正宗 | 初正貞 |
| | | 正吉子 |
| 嘉慶 | 正則 | 左兵衛尉 |
| 応永 | 四代正家 | 正近子 |
| | 正真 | 二代正広子 |
| 応永 | 政広 | |
| | 正兼 | 正近子 |
| | 政宗 | |
| | 正貞 | |
| | 兼安 | |
| | 正吉 | |
| | 正俊 | 貝 |
| 正長 | 政宗 | 政家弟 |
| | 兼光 | 兼安子 |
| 永享 | 三代正清 | |
| | 正元 | 正清子 |
| | 兼行 | 一乗 |
| 文安 | 正真 | 国正子 |
| | 正貞 | 政広子 |
| 康正 | 政宗 | 古刀政家門人 |
| 永正 | 正直 | 木梨 |
| | 貞信平 | 貝信平 |
| | 正房 | 貝 |
| 大永 | 正元 | 貝 |
| | 正光 | 貝 |
| | 正勝 | 貝 |
| | 正俊 | 貝 |
| 享録 | 正長 | 貝三原 |
| | 正興 | 貝 |
| | 政重 | |
| 天文 | 正家 | |
| | 正近 | 貝黒田助六正家父 |
| | 貞次 | |
| | 正家 | |
| | 正定 | 貝 |
| | 貞興 | 貝 |
| | 正重 | |
| | 正佐 | |
| | 正経 | |
| | 正則 | 貝 |
| | 正直 | 貝 |
| | 正久 | 貝 |
| | 正能 | |
| 兼元 | 正義 | |
| 文禄 | 正真 | |
| 弘安 | 正家 | 右衛門尉 |
| 建武 | 二代正家 | 初名正廣 |
| | | 左衛門尉　兵庫亮 |
| 康永 | 正光 | 左兵衛尉 |
| | | 初代正家弟 |
| 貞和 | 政家 | 左京亮 |
| | | 初代正家二子 |
| 正平 | 正吉 | 正国子 |
| | 正清 | 木梨貝正清 |
| | | 貝三原の祖 |
| 観応 | 兼安 | |
| 文和 | 兼次 | 一乗 |
| 延文 | 兼光 | |
| 永和 | 二代正宗 | 初正貞 |
| | 正則 | 正吉子 |
| 嘉慶 | 正則 | 左兵衛尉 |
| 応永 | 四代正家 | 正近子 |
| | 正真 | 二代正広子 |
| 応永 | 政広 | |
| | 正兼 | 正近子 |
| | 政宗 | |
| | 正貞 | |
| | 兼安 | |
| | 正吉 | |
| | 正俊 | 貝 |
| 正長 | 政宗 | 政家弟 |
| | 兼光 | 兼安子 |
| 永享 | 三代正清 | |
| | 正元 | 正清子 |
| | 兼行 | 一乗 |
| 文安 | 正真 | 国正子 |
| | 正貞 | 政広子 |
| 康正 | 政宗 | 古刀政家門人 |
| 永正 | 正直 | 木梨 |
| | 貞信平 | 貝信平 |
| | 正房 | 貝 |
| 大永 | 正元 | 貝 |
| | 正光 | 貝 |
| | 正勝 | 貝 |
| | 正俊 | 貝 |
| 享録 | 正長 | 貝三原 |
| | 正興 | 貝 |
| | 政重 | |
| 天文 | 正家 | |
| | 正近 | 貝黒田助六正家父 |
| | 貞次 | |
| | 正家 | |
| | 正定 | 貝 |
| | 貞興 | 貝 |
| | 正重 | |
| | 正佐 | |
| | 正経 | |
| | 正則 | 貝 |
| | 正直 | 貝 |
| | 正久 | 貝 |
| | 正能 | |
| 兼元 | 正義 | |
| 文禄 | 正真 | |
| 康安 | 正久 | 木梨派 |
| 貞治 | 正国 | 古刀 |
| | 政広 | 正宗子 |
| 正重 | 初代正家の子 |
| 正近 | 正宗子 |
| 二代正清 | 左衛門尉 |
| 応安 | 初代正家子 |
| 貞次 | 右衛門尉 |
| 政清 | |
| 正信 | 政家子 |
| 永和 | 正重 | 政家子 |
| | 正賀 | 木梨 |
| | 正則 | 正吉子 |
| 長禄 | 正近 | 正真子 |
| 寛正 | 正景 | |
| 応仁 | 貞広 | |
| 文明 | 兼安 | |
| | 政家 | |
| | 正近 | |
| | 政俊 | |
| | 三代正宗 | |
| | 兼利 | 木梨三原派坂田住 |
| 明応 | 正真 | 貝 |
| | 正興 | |
| 文亀 | 正次 | 貝 |
| | 正義 | 貝 |
| 永正 | 正秋 | |
| | 正広 | 貝 |
| 弘治 | 正嘉 | 貝 |
| | 正奥 | 貝 |
| 永録 | 正広 | 貝 |
| | 正盛 | 貝 |
| 元亀 | 正家 | |
| | 正賀 | 貝 |
| | 正行 | 貝 |
| 天正 | 正守 | |
| | 正広 | |
| | 正成 | 貝 |
| | 正直 | 貝 |
| | 正長 | 貝 |
| | 正俊 | 貝 |
| | 正近 | |
| | 正定 | 貝 |
| | 貞興 | 貝 |
| 元和 | 正賀 | 貝五阿彌 |

刀匠時代別（三原・木梨・貝に住せしもの）

御調郡史（1925・大正14年発行）より